

9

衛生展覧会と中心感染説

竹原 直道

宗像市

衛生展覧会という、今日では性病の模型展示や人体の実物標本といった、ある種いかがわしき漂うイメージが出来上がっている。しかし元々は明治末から始まった大日本私立衛生会が主導する半官半民の衛生啓蒙運動の一環として行われた庶民向けの展覧会であった。初期の展示は衛生知識の啓蒙・向上をめざしたものが中心であったが、大正末から昭和初期になると展示の内容は、特定の疾病をターゲットに絞った攻撃的なものへと変化していった。中心感染説も同時代に展開された言説の一つである。宝月理恵氏はその著『近代日本における衛生の展開と受容』(2010年)のなかで、歯科医師の医療専門職化過程における学校歯科医制度確立運動のツールとして、歯牙中心感染説とフレッチャリズムを挙げている。宝月氏はこれらの言説が歯科の側から積極的に取り上げられたとする。それはその通りであった訳だが、中心感染説もフレッチャリズムも、いずれも歯科から提起されたものではない。その辺の事情を衛生展覧会や通俗衛生啓蒙書のなかに探り、これらの言説の歴史的背景について考えてみたい。

中心感染説は、Billings F. (1912) が focal infection という言葉を最初に唱えたことによって、学説として認識された。我が国では、耳鼻科や歯科の重要性を訴える論拠のひとつとなった。一方では不完全な歯の保存療法が原発病巣となり得ることも早くから指摘されていた (Price W.)。演者は中心感染説そのものの当否を論ずる立場にないが、少なくともその当時、この説が証明された訳ではなかったといえる。中心感染説は、証明は難しいが庶民にも分かりやすい学説なので、最初から衛生プロパガンダのツール化する危険性を孕んでいたのである。中心感染説の我が国での初出は明らかではないが、例えば1917年には、アメリカの衛生関係者に広く読まれたという Fisher I. らの著書が河上肇訳『如何に生活すべき乎』として出版されている。そのなかで河上は「竈的病毒感染」という言葉を使用している。東京歯科医専の遠藤至六郎(1920)は「歯牙病竈(中心)感染」を用いた。衛生展覧会への初出の展示時期は不明だが、1926年大阪衛生博覧会の報告書『衛生大観』に大阪歯科医師会の文章があり、「歯牙中心感染説」の文言が見出せる。しかし展示用の掛図は「治療衛生」のブースに大阪医科大学出品として展示され、その図は英語で印刷された元図の上から墨で日本語の説明を加えたものであった。この大阪衛生博覧会の例でも分かるように、中心感染説の発信源はアメリカであり、日本の医師がこれを導入・喧伝し、歯科医師がそれを利用するという流れであった。これは食物の粉碎咀嚼法＝フレッチャリズムについてもいえることで、そもそもの発信源はアメリカの雑誌記事であった。それを1911年、ジャーナリストの中尾清太郎が新聞で紹介したが、なんの反響も得られなかった。ところが1922年、九州帝大の宮入慶之助教授が『宮入衛生問答』でフレッチャリズムを取り上げるや否や、歯科界は早速これに飛び付き、以後多数の衛生書や通俗啓蒙書に記載されるようになるのである。まとめると、戦前の学校医をめぐる歯科側の専門家支配権確立運動のツールとして、中心感染説とフレッチャリズムの学説が用いられたが、これらの説は歯科から独自に提起された訳ではなく、医師から紹介され広まったものであった。このことが、学校歯科医制度がさしたる抵抗もなく文部省に受け入れられる理由のひとつとなったのであろう。